

## 2. 動物たちの願いごと

各務原市立鵜沼第三小学校

6年 河村 碧希 広瀬 あい 河合 諒久  
田口 おたる



敦賀市立敦賀南小学校

6年 戸井田 夏子 米原 杏奈

これは、ある不思議な家族のお話です。

土曜日の朝、

「行ってきまーす」

という元気な大きい声が聞こえました。この男の子は、ゆうと君です。次に出てきたのは、ゆうと君の姉、あやちゃんです。二人はとてもウキウキした気持ちでした。なぜかという、今日は動物園に行く日だからです。お父さんとお母さんも喜んでいました。

動物園に着きました。

「うわあー。動物がいっぱいいる。動物とお話できないかなあ」

と、ゆうと君が言いました。

「お話なんて、できるわけじゃない。動物園なんだから、動物がたくさんいるのはあたりまえでしょう。早く見に行くよ」

と、あやちゃんが言いました。動物を見ていたらキリンが近づいてきました。ゆうと君はうれしくなりましたが、あることに気付いておどろきました。

動物たちが言葉を話していたのです。

動物たちはゆうと君をじっと見つめました。そしてキリン、コアラ、ライオン、トラ、サル、ゾウが、次々とゆうと君に話しかけてきたのです。

「お願いします。君にやってほしいことがあるのです」

ゆうと君は不思議に思いました。しかし、動物が大好きなので、

「動物も人間も関係ない。困っているんだから、助けてあげるよ」

と、動物の願いを聞くことにしました。一番最初は、キリンさんです。キリンさんのお願いは、

「一番目の私が言うのはなんですが、ゆうと君に話しかけたコアラ、ライオン、トラ、サル、ゾウの順番にお願いを聞いてあげてください」

ということでした。

「キリンさんはやさしいんだね。お友だち思いのキリンさんらしいよ。分かった。その願いをかなえてみせるよ」

と約束し、他の動物たちに報告に行きました。

「キリンさんからのお願いは、ぼくに話しかけた順番にお願いを聞いてあげてとすることなので、コアラさん、ライオンさん、トラさん、サルさん、ゾウさんの順に話を聞くよ。分かりましたか。では、よろしくお願いします」

ゆうと君があまりにもていねいに言うものですから、動物たちも、  
「分かりました」

と、ていねいに答えました。そして、キリンさんの願いをかなえたので、キリンさんの所に行って、

「みんな、キリンさんの願いを守ってくれるんだって。みんなとてもやさしいね。次はコアラさんだね」

と、ゆうと君が言いました。すると、キリンさんは、  
「ありがとうございました。そうですね。次はコアラさんです」

と言うと、さっそくコアラさんが、  
「やあ。ぼくのお願いはね。んーとね。そのね。んー、ちょっと待ってね。あっ、そうだ、ぼ、ぼく、ゆ、ゆうと君と、お、お友だちになりたいんだ」

と、思い切って言いました。ゆうと君は、  
「いいとも。ぼくたちは出会った時からお友だちだよ。言葉が話せなかったとしてもね」  
と、やさしく言ってあげました。

「ありがとう。ゆうと君とお友だちになれて、よ、よかったよ。本当にありがとうね。これ以上の感謝の言葉は思いつかないほどうれしいよ。えへへ」

と、てれくさそうにほほえんで言いました。

すると、  
「ガオー」

と、こわい顔のライオンさんが大きな声で向かって来ました。そして、ライオンさんは、

「おれの願いを聞いてくれ！」

と、おっかない声でたのんできたので、ゆうと君は、ごくんとつばを飲み込みました。  
ところが、ライオンさんは、

「めしの時間だ。また来るから後で話そう」

と、さっさと行ってしまいました。ライオンさんが願いを聞いてと言った時、ゆうと君は、いやな予感がしました。そして三十分後、口の周りをペロリとなめながら、ゆうと君の所に来ると、他の動物たちをおっばらって、

「実は、おれ、ライオンのくせして、弱虫なんだ。夜、一人ぼっちの時は、こわくてうずくまっているんだ。もう、みんなに、ば、ばれかかっているから、これ以上知られないようにしてほしいんだ。いいか」

と言うのです。  
ゆうと君は不安でしたが、  
「分かった。やってみるよ」

と、快く引き受けました。そのとき、ライオンさんはニヤリと笑ってこう言いました。  
「約束だぞ。やめるとか言うなよ」

ゆうと君は、不思議に思いながらも、うなずきました。するとライオンさんは、  
「よく言った。もしやめると言ったときや、ばれた時はー、ワハハハハ。約束は必ず守ってもらうぞ！」

と言いました。

(ええっ?)

ゆうと君、大ピンチ! 目をパチパチとさせました。

ライオンさんの約束とは、いったい……。★

「約束って……」

ゆうと君は聞きました。すると、ライオンさんは、

「ワハハハ。約束というのはな、おまえを食っちまうってことだ」

ゆうと君は急にこわくなりました。

「だが……」

ライオンさんは言いました。

「おれの願いをかなえてくれるなら、弱虫なのがばれないようにしてくれるなら、食わないでやってもいいぞ」

「……うん。わかったよ」

ゆうと君はそう言って走り出しました。

なんだか知らないけれど、動物園を出たすぐのところに神社がありました。

「そうだ!」

ゆうと君は、そのまま神社へ入っていきました。

～数分後～

ゆうと君は、大事そうに何かをにぎりしめて、動物園にもどってきました。

「はあ、つかれた。はいっ」

ゆうと君は、にぎりしめていた物を、ライオンさんにわたしました。

「なんだ、これ?」

「お守りだよ。これで大丈夫。夜もひとりで平気だよ」

「ありがとう!」

すると、次はトラさんが出てきました。

「そしたら、ワイの願い、かなえてくれへんか。ワイは名前がほしいんや!」

「名前? ううん……」

「タマ」

「きゃっか」

「じゃあ、ひろし」

「きゃっか」

「ええー、じゃあ、どんなのがいいの?」

ゆうと君は、考えながら聞きました。

「そらあ、ワイはかっこええ名前がええに決まってるやろ」

「ううん……。それじゃあ、虎次郎!」

「まあ……うん。ええんちゃう? ありがとな。ゆうと君!」

トラさんは笑顔で帰っていきました。

「次は、ぼくたちだよ! ぼくたち!」

そこには、サルさんとゾウさんが待っていました。

「わたし、最近、成長期でおなかですくんです」

「ぼくも、ぼくも！」

ゾウさんとサルさんは、声を合わせて言いました。ゆうと君は聞きました。

「わかったよ。ゾウさんは何をいっぱい食べたいの？」

「やっぱり、りんごをいっぱい食べたいです」

「うん。わかった。サルさんは？」

「そりゃあ、もちろん、バナナ！」

「わかった、わかった。じゃあ、いっぱい取ってくるね」

ゆうと君は、てんこ盛りのりんごとバナナを持ってやってきました。

「うわあ、ありがとう！」

「ありがとうございます。感激！」

ゾウさんとサルさんも、とってもうれしそうな顔で帰っていきました。

「いいことしたなあ。満足、満足」

ゆうと君は、いい気持ちでいっぱいでした。英雄にでもなった気分でした。

すると、だれかがゆうと君を呼んでいます。

「ゆうと、ゆうと、ゆうと！」

聞き覚えのある声が、耳にひびいてきます。

(なんだ、なんだ、うるさいなあ)

さらに大きな声が聞こえました。

「ゆうとっ！」

「うわあっ」

えっ、どこ、ここ？ そんなことを思っていると、そこは、お父さんの車の中でした。一人で混乱していると、あやちゃんが言いました。

「ゆうと、動物園に着いたよ。早く、早く、おいていくよ」

ゆうと君は、そこで初めて気付きました。今までのことは、全部夢だったのだと……。

「待ってよー。おいていかないで」

家族を追いかけていくゆうと君の後ろ姿が、だんだん小さくなっていきます。